2012年度

（学生団体）
「福島大学災害ボランティアセンター」
活動報告書

2013.3.31

「多様化する支援の中で」

人間発達文化学類４年　安達隆裕

東日本大震災から２年が経ちます。２年前であってもその記憶は新しく、しかし各々に残すものも差があり、震災が残すものは既に自分で、自分だけで確立するべき時期になったのではないでしょうか。思えば、福島県に居ながらも「震災」というワードを耳にすることも少なくなったように感じます。

去年からこのフィールドに関わる中で、「学生ができることは何だろうか」ということをずっと考えさせられました。同じ福島大学内、県内の学校、県外の学生、そして大人たち、多くの境遇も年齢も違う人と出会ったからこそ、「自分」と向き合うようになったのだと思います。大人の話を聞けば長期的な支援が必要などと聞かされ、専門学校・短大の学生の話を聞けばカリキュラムとの兼ね合いの中で活動をしていると聞き、福島大学が羨ましいなどといった言葉も投げられました。関心を寄せていただき、私たち学生の話に耳を傾けてくれる方がいらっしゃるのはとても嬉しいことです。活動に参加して、自分の中でやりがいを感じられる瞬間もとても嬉しいことでした。根幹に関わりますが、ボランティアという単語は私たちの活動に適しているのでしょうか。きれいなイメージが先行し、私たちの悩みというものは伝わるのでしょうか。悩みを伝える是非も分かりません、しかし学生の姿を見ているとこればかり考えさせられます。

何をするにしても責任というものは付きまといます。ある共感してしまった相談内容を掲載したいと思います。「最初は何かがしたい！という気持ちから活動に参加しました。やりがいを感じることができ、継続していきたいと思いました。しかし、授業・サークル・バイト・進路の用事と被ってしまうとボランティアというものは優先順位では低くなってしまいます。でも、一度関わりをもったのを音沙汰なしに切りたくもありません。加え強制のような空気を感じてしまうのでしょうか。」活動を継続する学生の中でこのような悩みを持った学生は多いのではないかと思います。それに対する一つ、強く提示できる答えを出せればと考えていましたが、出ずに卒業となってしまいそうです。

学生主観ではありますが、支援の形も多様となったと感じます。傾聴活動・保養事業・コミュニティビジネス・就労支援・多くの自治会の自立サポートなど、去年とは変わって固定化された事業に取り組む団体が増えたと思います。その中で、専門性の持たない学生がどのように継続的な活動に取り組めるのでしょうか。外的な評価はいらないはずの活動の中で、何が私たちを切迫させるのか分かりません。震災そのものの考え方に加え、関わり方までも自立して考えなければならないのでしょうか。

現場から少し身を引いた意見でありました。しかし、以降に続きますのは、悩みを抱えながらも後輩たちが残していった成果の１つ１つです。これを手に取った方に響くもの、そして震災そのものをどう捉えるか、その一助になっていただけたらなと思います。

①被災地現場での復興支援活動

○南相馬市小高区での泥出し・がれき撤去

【概要】原発事故の影響で避難指示が出ていた南相馬市小高区が震災から 1 年経った 2012 年 4 月 16 日に警戒区域解除となった。しかし、すぐに住民が戻れるという環境ではなかった。5 月に小高を訪れた。津波によって流された家や泥、瓦礫等がそのままになっており、1 年という時間が止まっていたというような状況であった。南相馬市のボランティアセンターでは、泥出し・瓦礫撤去等のボランティアの受け入れを行っていたため、そこで活動を行うことにした。活動を行う中で、側溝には泥が溜まっており、なかなか取り除くのに活動時間いっぱいに使った。家の周りには、泥だけでなく、木や瓦礫、浜から流されてきたカニが大量に出てきた。しかし、作業を行っても処理をする場所がなかったため、結局は、家の一部分にまとめて置いた状態である。12 月に再度、担当した家を訪れた。その時も、依然として同じような状況であった。

【活動日】平成 24 年 5 月 20 日（日）

【参加者】災ボラ 3 名 関西大学 西谷・計倉 京都文教大学 松波 立命館大学 児玉

【感想】松波 澪（京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科 3 回生）

2011 年 5 月 20 日。初めて小高地区に入って私は衝撃を受けました。震災当時のまま家や店が放置され、ついさっきそれが起こったのではないかと感じました。今でも誰か住んでいるような生活感があるのに、人が全くいない違和感からは恐怖すら覚えました。さらに奥へ進むと、畑や水田だった場所は今や失地帯となり、何も言われなければ湖だと勘違いするほど広い範囲で水が溜まっている様子は言葉にできませんでした。もちろんこの 1 年踏み入ることができない土地だったので、震災当初から変わらないのは当たり前だと言えばそうなります。それでも 1 年 2 か月もの間、当時のまま放置されていることに心が痛みました。

泥出し活動では、初めての力仕事に、正直体力はどんどん奪われていきました。そんな中、そこにお住まいだったお母さんは私たちの体調をずっと気にしてくださり、それがとてもありがたくて私たちが逆にお世話になったなと思います。泥出しの活動は、仮設での足湯活動とは全く違い、家の周りが片付いていくごとにおうちの方のうれしそうな顔と、どこか切なげな顔を見ることで複雑な心境もありました。ですが、来てよかったと心底感じる活動でした。ありがとうございました。

【小高区の状況】

～2012 年 5 月 20 日（日）～

～2012 年 12 月 15 日（土）～

②避難指示解除準備区域での復興支援活動

○南相馬市小高区での子どもへの学習支援・遊び支援

【概要】南相馬市小高区の小中学生は、仮設校舎での授業を続けています。特別教室もなく、校庭も体育館も間借りして、毎日の生活を送っています。今回、長期の休暇を利用し学び＆遊びの場を設け、受験を経験し大学で学ぶみなさんと接することで、多くの知識や情報を知ることによって、今後、自分自身の目標探しができればと南相馬市小高区親の会が企画し、災ボラで協力しました。

【期間】夏期休業 平成 24 年 8 月 1 日(水)～3 日(金)

8 月 6 日(月)～10 日(金)　　計 8 日間

冬期休業 平成 24 年 12 月 22 日(土)～27 日(木)　計 6 日間

【場所】南相馬市鹿島区万葉ふれあいセンター（南相馬市鹿島区寺内字迎田 22）

【参加者】災ボラ 夏期：6 名 冬期：8 名

【内容】子ども達の学習支援・遊び支援

(夏期最終日)バーベキューの提供　(冬期最終日)餅つきの提供

【活動写真】

勉強会

勉強会

バーベキュー

餅つき

【感想】

≪保護者の声≫

井島 順子さん（小高区小・中学校児童生徒親の会/相馬市観光協会）

慣れない土地で不自由な生活環境の中、子供達の安心・安全な居場所の確保と、避難で遅れている学習の補助及び指導、仮設住宅等で精神的なストレスを抱えている子供達の心の開放や運動する機会を与え、広い視野で自分の将来について考えてほしい親の思いから立ち上がった。進学意識の向上と将来の展望について、現役大学生と触れ合い、学習計画の立て方や、効率的な勉強の仕方、楽しく集中して学ぶことを味わってもらおうと考えた。

大学生の要請、移動費及び滞在費、開講案内等の経費を賄うため、地元企業数十社の協賛金とソフトバンク主宰の東日本復興支援財団「こどもサポート基金」の申請および、南相馬市教育委員会の後援による「まちづくり活動支援事業」を利用して、夏休み 8 日間・冬休み 6 日間実施した。

開催当初は参加人数も少なく、手探りでの学習指導だったが、日を追うごとに人数も増え、内容も充実してきた。友達を失った子供達が、学校を超えて友達作りができ、学年をこえて、規範意識の高揚や協力、そして思いやりの心が育まれた。大学生達に臆することなく触れ合い、進学に対する意欲や勉強する姿勢が徐々に改善されてきたのは嬉しい限りだ。ただ、小学生の割合が高く、今後受験を控えた中学生への浸透と保護者の理解を深めていきたい。また、ボランティア学生も理系・文系バランスよく集めて、継続的におこなっていきたいものだ。

≪学生ボランティアの声≫

菅野 勇希（福島大学現代教養コース 1 年）

私は、夏と冬どちらも、「南相馬で子供たちとふれあおう」という企画で南相馬に行ってきました。この活動に参加して “警戒区域のすぐ近く”という閉鎖的な空間にどれだけ外部の者が関わっていけるか、 その大切さを学んだような気がします。 子ども達と接していて自分達に興味を持って接してくれていると感じる場面がいくつかありました。「あれは？これは？」と興味津々に聞いてくる子や、「宿題終わったから別の問題作って！」という子もいました。この外部からの刺激が少ないのは子ども達にとって良い事ではないと考えています。外部からの刺激（私たち大学生）と関わる時間が子ども達にとって「外の世界との繋がり」となり、 それが子ども達の生活にとっての刺激になるならば私はこの活動を続けたいと思っています。もっと多くの方に参加してほしいと思いました。

○川内村 村民との交流のつどい

【概要】福島大学うつくしまふくしま未来支援センターは、平成 24 年 1 月 17 日の双葉地方八町村と福島大学との震災復興に関する連携協力協定書の締結のもと、双葉地方八町村の復興支援活動を推進する拠点として、このたび、川内村コミュニティセンターに「いわき・双葉地域支援サテライト」を設置いたしました。このサテライトを拠点として、川内村の復興支援を行っていくなかで、村民との交流のつどいを行うことになった。

【主催】川内村 福島大学うつくしまふくしま未来支援センター（FURE）

【日時】平成 24 年 6 月 16 日（土） 13：00～16：00

【会場】川内村コミュニティセンター 川内村村民体育センター

【内容】

・主催者あいさつ・演奏会・特別講演・相談コーナー

・学生との交流（足湯、子どもたちとの交流、ポップコーン・綿菓子の提供）

【参加者】災ボラ 9 名 明治大学商学部 5 名

【活動写真】

ポップコーン・綿菓子提供

ボール遊び

足湯

【感想】 長谷川 歩（福島大学行政政策学類 4 年）

2012 年 6 月 16 日、私は初めて福島県川内村を訪れた。放射能被害に負けず、帰村宣言を発表した力強い住民の方々に会うことができるのを、楽しみにしていた。一方で、川内村が厳しい状況にあることは変わっておらず、今回の交流のつどいを通じて少しでも住民の方々の笑顔を見たいと思っていた。

川内村コミュニティセンターに着くと、あいにくの天気にもかかわらず、集まった方々のにぎやかな声が聞こえてきた。特に、子どもたちの元気に圧倒されそうになるほどだった。昼食後、いよいよ交流のつどいが始まった。今回私が担当した綿菓子機とポップコーン機は新たな機械を導入し、これまでより勢いよく動いているようだった。この 2 つは子どもたちやご高齢の住民の方に非常に好評で、列ができるほどの人気を得ることができた。

今回の活動を通して、得たものは住民の方々のポップコーンのように弾ける「笑顔」であった。今回の活動一過性のものとすることなく、これからもさまざまな形で川内村に関わっていけたらと強く感じた。

④仮設住宅・民間借上げ住宅居住者との支援活動

○足湯

【概要】震災後、福島の地元学生で継続していける活動として行っている。たらいにお湯をはり、足をつけていただき、私たちは利用者のかたの手をもみほぐす、という活動である。１対１でコミュニケーションを取ることや手もみを通して、初対面でも打ち解けやすく、その会話を重視している傾聴ボランティアでもある。会話を「つぶやき」として書き留めておき、それをもとにニーズを拾い上げたり、活動のきっかけにしたりしているほか、人と人をつなぐツールとしての役割も果たしている。お茶を飲むスペースを設け、気軽に立ち寄って談笑できる雰囲気である。

【活動期間】平成 23 年 5 月 15 日～継続中

【場所】仮設住宅：笹谷東部・南矢野目・宮代・石神第一・森合・北幹線第一・
北幹線第二・旧明治小学校跡・旧飯野小学校跡・旧松川小学校跡
富岡町民間借上げ住宅さくらサロン
（つぶやき集計による利用者数：のべ 370 人
※本年度はつぶやき未記載が多数あるため、データとしては少なく残っている）

【協力】日本財団、日本アロマ協会、Link with ふくしま、コスモモア、学生と世界をつなごうプロジェクト、福島大学国際交流センター

【参加者】各回約 3~15 名

【内容】足湯

【足湯活動の課題・改善点】

・初めて参加する学生への対応

足湯活動に初めて参加する学生は、何を話したらよいか、何か言ってはいけないことがあるか、基本的な足湯活動のやり方など、わからないことがたくさんあります。まず学生間でしっかりサポートし、経験談を話してあげると、不安を軽減できてよい。例えば、会話があまり得意ではない学生には、話題例を話し、傾聴活動なので話題を続けようと気張る必要はないということを説明します。また、初めて利用者の方を相手にするときは、ある程度は側でフォローすることが望ましいと思われます。

・つぶやきカードのデータ化

回収したつぶやきカードはパソコンを使用し、データ化してニーズを把握するために使用しますが、現在その作業が滞っています。今後、手分けして入力して、まとめていきます。

・足湯にこない住人へのアプローチ

足湯を利用される方は、以前も利用したことがある方がほとんどで、家の中で引きこもってしまっている方や、一部の仮設では男性の方など、足湯にこない住民の方は多くいます。きっかけをつくり、仮設の方が来やすいような雰囲気づくりや日程などを、これからも考えていく必要があります。

・学生ボランティアや地域住民への宣伝

また新たに見えてきた課題として、学生ボランティアが集まらなくなってしまったことがあげられます。以前は一回の足湯活動に５～６人の学生が集まることが多かったのですが、少ない時では２～３人で活動することもありました。今まではらくらく連絡網のフリーメーリングシステムを使って募集してきましたが、もっとよい宣伝方法を模索しています。また、地域住民の方には、仮設掲示板のチラシでの宣伝でしたが、早すぎても忘れてしまい、遅すぎると集まらないといった声が聞こえたので、十分に考えながら行っていきたいと思います。

【考察】

足湯は災害ボランティアセンターで定期的に行っている活動として定着し、仮設の方にとっても福大生＝足湯のように非常になじみのあるものになってきました。しかし、継続して活動していく一方で、困難な点が多く見受けられるようになりました。改善点があるということは、よりよくなるということだと思うので、現状に満足せず、仮設住民の方に寄り添って、ニーズを拾い出し、支えていけたらと思います。また毎回足湯をするのでもなく、語り場のようなものだったり、お茶のみの場でも日々のストレスを軽減したりといったことができると思うので、状況に応じて活動していきたいと考えます。

【感想】三浦恒彦（福島大学人間発達文化学類 １年）

自分にとっては福島大学に入る理由の一つでもあったのがこの災害ボランティアであり、その主な活動でもあった足湯の活動にこの１年間を通してとても深く関われたのはとても大きかったです。

中でも最初はすごく真面目で堅いイメージを持っていたこの活動が参加を重ねるにしたがって仮設に住んでいる住民の方々との交流やたまにある行事なども合わさると普通に楽しんで活動を行うことができました。

○高齢者サポート拠点あづまっぺでのサロン活動

【概要】 福島大学近くにある松川第一仮設住宅にある高齢者サポート拠点“あづまっぺ”でサロン活動を行った。先の見えない仮設住宅での避難生活の中で、外にでるきっかけを提供することで引きこもりを防止し、また仮設住宅内での住民交流、住民と学生の交流などを目的として行った。仮設住宅の住民の方の意見を参考に学生でイベントを企画し、住民の方と協力する形でイベントを作り上げました。

【内容】 ５月：プランターへの花植え
９月：流しそうめん
１１月：お団子作り
１２月：人形劇鑑賞

【場所】 松川第一仮設住宅

【参加者】 イベントによるが、平均して学生 10~15 人参加

【感想】 渡邊知佳（行政政策学類３年）

あづまっぺサロンの企画リーダーとして参加させていただきました。仮設住宅に足を運び、住民の方とお話をするたびに、だんだんと私たち学生の顔と名前を覚え気軽に話しかけてくれるようになったのがとても嬉しかったです。仮設住宅では何もすることがなく、どうしても家にこもりがちになってしまう現状があります。サロンの開催を心待ちにしてくださっている住民の方も多く、それぞれに住民同士、住民と学生の交流を楽しんでいるようでした。特に仮設住宅に入居しているのが飯館村の方で震災前は農業をしていたという方が多いので、５月に行ったプランターへの花植えでは私たち学生が住民の方にやり方を学びながら花植えを行ったりする姿が見られ、有意義な活動であったと思います。通常のサロン活動というと女性の参加に偏ってしまう傾向がありますが、流しそうめんやお団子作りなどの食べ物を食べる活動などは老若男女問わず参加しやすいということが分かりました。これからも住民の方の意見を聞き入れながら有意義なサロン活動を行っていきたいです。

⑥県外避難者・移転者との絆連携活動

○家族キャンプ

【概要】震災の影響により、福島県内から県外へ避難した方は、約 6 万人います。それぞれの家族は、それぞれの場所で私たちが考えてもみなかった様々な問題に直面しています。 離れ離れで暮らしている家族もいます。避難した先で苦労されている方もいます。 福島県に対しての負い目も感じている人もいます。しかし、どれも重要と感じます。 私たちはそのような家族を支援したいと思い、アサヒビール、県南酒販様の全面協力、行政政策学類のご支援、ＪＴＢの全面サポートにより、夏に 2 回、冬に 1 回合計 3 回のキャンプを企画いたしました。

【期間】第 1 回(山形方面) 平成 24 年 8 月 11 日～13 日
第 2 回(新潟方面)　　8 月 20 日～22 日
第 3 回(首都圏方面)　　12 月 22 日～24 日 各 3 日間

【場所】南会津アストリアホテル(福島県南会津郡南会津町高杖原 353)

【参加者】災ボラ 山形：20 名　新潟：21 名　首都圏：16 名
参加者 山形：152 名 新潟：102 名 首都圏：111 名

【内容】南会津の大自然の中で、家族で精一杯楽しんでもらう。
夏⇒1 日目　飯盒炊飯（カレー・バーベキュー)、
2 日目　ウォークラリー、 やんちゃコース（魚のつかみ取り、芋掘り）
ゆったりコース（温泉)、キャンプファイヤー、花火
3 日目　木工体験、大内宿
冬⇒1 日目　そば打ち体験
2 日目　スキー教室、宝探し、南会津ゆったりツアー、ケーキ作り、
クリスマスパーティ、スノーランプ、打ち上げ花火
3 日目　お菓子の城・ハートランド

【活動写真】

飯盒炊飯

ウォークラリー

魚のつかみ取り

キャンプファイヤー

花火

木工体験

そば打ち体験

スキー

クリスマスパーティ

スノーランプ・打ち上げ花火

【感想】

第 2 回リーダー 鈴木元(福島大学行政政策学類 3 年)

この企画の準備を進めていくにあたって 4 月に初めてアサヒビールさん、JTB さんとのミーティングを行い、その後スタッフを集めてこの企画は進んで行きました。家族の絆を深めることを目的として何ができるか、どんなことができるかを考えながら「参加してくれた方を楽しませる」ことを 1 番の目的として準備をしてきました。申込前にはこの企画の広報活動を行うために実際に山形や新潟に足を運び、そこで福島から避難されている方とお話しをさせていただく機会もありました。そこでは「今すぐにでも本当は福島に帰りたい」という方もいれば、「もう福島には戻りたくない」という方もいて、今私たちがやろうとしていることは果たして正解なのか、何をするべきなのか、などを改めて考えさせられる部分もありました。結果として参加の申し込みは山形も新潟も定員よりも多く集まり、抽選という形にはなってしまいましたが無事に参加者が決定しました。

キャンプ当日は南会津の地に家族が集い、様々な企画を通じて久しぶりの家族の時間を楽しんでいただきました。3 日間の行程において、少し予定を詰めすぎてしまったことが反省点ではありますが、キャンプ中にたくさんの笑顔を見ることができたことや、参加者から「ありがとう」といった言葉もいただいたという点では、私たちの目標は達成することができたのではと思います。

これまでこの企画に携わらせていただく中で、新たなつながりができ、また様々なこと学ぶことができたことは私にとってとても貴重な経験になりました。キャンプは無事に終えることができましたが、今もなお県外避難者がたくさんいて離れ離れに暮らしている家族がたくさんいるのが現実です。このことを忘れないで、これからも活動に関わっていきたいと思います。

第 3 回リーダー 安達拓哉(福島大学行政政策学類 3 年)

「ふるさとで過ごそう！家族のクリスマス！！in 南会津」は、12 月 22 日～24 日で行われました。原発事故以降首都圏に避難されている方を対象としていたこともあり、夏のキャンプに比べ、幅広い地域の方々に来ていただきました。 バスは東京発が 2 台、神奈川発大宮経由が 1 台、いわき発が 1 台、福島発郡山経由が 1 台と多方面から南会津に来るということもあり、こういったことからも原発事故の影響は家族をこんなにも離ればなれにさせてしまったのかということを感じました。家族の方々が南会津に集結した時、なかなか開会式が始められないほど家族単位での「元気だったか」「楽しみだね」といった会話が絶えず続いていたことに家族の温もりを感じました。

初日は、そば打ち体験のみを行いました。地元の方々の協力もあり、自分たちで打ったそばをその場で食べるといった貴重な体験をさせていただきました。2 日目は、スキー教室、南会津温泉ツアー、ケーキ作り、クリスマスパーティを行いました。夕食後にパーティを催し、楽器を使ってみんなで歌を歌ったり、フォトフレーム作りをしていただりして家族

内の創作や全体での歌を通して家族の垣根を超えた一体感も感じることもできました。サプライズでゲレンデにクリスマスツリー型に作ったスノーロードや夏に引き続き上げてもらった花火で、参加者、スッタフ一同感動に包まれました。盛りだくさんの 2 日目でしたが、初日に比べて家族内、また家族とスッタフの間にさえも暖かさを覗かせるような素敵な 1 日でした。

帰りのバスに乗る際、お母さん、2 人の小さな女の子と父が乗るバスが違った家族がありました。お母さんと 2 人の小さな女の子は首都圏へ父は福島行きのバスでした。2 人の小さな女の子はバスの前で人目をはばからず泣き出してしまいました。その光景は今もなお目にやきついています。事故とか数値とか復興とかそういった現状でなくて、精神・心の現状を見たような気がしました。あの家族が少しでも早く一緒にふるさとで過ごせるようになるよう、またふるさとに帰れる日が遠かったとしても家族の絆を確かめ合いながら過ごせていけるよう、自分たちに出来ることはしていかなければならないと思いました。

⑨福島元気発信活動

○国連持続可能な開発会議（RIO+20）

【概要】1992 年の「国連環境開発会議（地球サミット)」から 20 周年を迎える機会に、同会議のフォローアップ会合として「持続可能な未来」を話し合うため、6/20～22 にブラジルのリオデジャネイロにて開催された。本会議は 3 日間のみであるが、その日程の前後数日間も各国首脳をはじめ市民や企業、NGO 等が参加し、グリーンエコノミー、資金、市民参加、持続可能な開発目標(SDGs)のようなテーマで様々な会議やシンポジウム、ダイアログのようなサイドイベントが行われ、持続可能な未来を話し合った。そして災ボラの学生も県内の市民活動グループのメンバーや農家と共に参加し、東日本大震災、原発事故の被害の現状を「福島の声」として届けた。現地では各国の NGO と連携しながら暮らしの現状を伝え、それを世界中の問題として受け止めてもらい、市民自らが主体となって未来を創ろうとしている姿を伝えた。

【活動期間】平成 24 年 6 月 14 日～25 日

【場所】ブラジル・リオデジャネイロ

【協力】NGO ピースボート、地球サミット 2012JAPAN、アースデイ東京、ワールドシフト・ネットワーク・ジャパン、A SEED JAPAN、CSO ネットワーク

【参加者】災ボラ 1 名、県内より 3 名（他にピースボートより数名）

※全体的には国連加盟 188 か国及び 3 オブザーバー (EU, パレスチナ, バチカン) から 97 名の首脳及び多数の閣僚の他、各国政府関係者、国際機関、企業及び市民社会から約 3 万人が参加。日本からは 130 名の参加。

【内容】ブラジル政府貸与スペース、国連公式サイドイベント、非公式サイドイベントにて東日本大震災概要や福島の状況の発信、対話イベントを通して各国の人々と意見交換の実施。

【感想】本間 美雪（福島大学行政政策学類 3 年）

今回、大変貴重な機会をいただいてブラジルに行ってきました。セキュリティの徹底している公式サイドイベントで各国の代表の方々に福島の状況を発信したほか、市民が自由に出入りできる屋外のイベント（ピープルズサミット）では市民とひざを突き合わせて対話を行いました。こちらの会場参加者の方々の反応は大きく、他国の方や小学生のも含め「他のエネルギーに移行しないのか」「自分の国でも原発が心配だ」「震災の時は寒かった？」などと次々に意見や質問が上がり、自分の問題として考えてくれたように感じました。そして、現在の震災関連の報道はほとんどされていないことがわかりました。更には、ブラジルから日本にきた労働者が高賃金のために原発の危険な部分で働いているという問題にも触れ、私たちも社会の構造に対する知識や考えを深めていく必要があると感じました。 また「幸せってなに？」という私たちからの問いには

・選択の自由があること

・親切。お金ではない

・好きな人と健康に暮らすことだが、周りの人が幸せでなければ幸せではない などの意見が寄せられました。とても陽気で、よく笑うブラジルの人々は日本人とまったく異なる印象ですが、価値観の共有ができたように思います。

こうした交流を通じて、知識や文化の背景が異なる人々に伝えることの難しさを感じましたが、その一方で、ブラジルは日本と離れているようでも社会構造や環境問題等について話し合うことができる国だということ、一般市民一人ひとりが問題意識をもっているということもわかりました。　震災に関する情報が減っていく中で私たちにできることは、単に被害の状況や結果を伝えるだけではなく、福島に住む者だからこそわかる現状・想いを伝え、また聞き手と共に考えることではないでしょうか。そのことは私たちにしかできないことだからです。そして、例えば福島の事故における社会構造が先進国、途上国の関係の縮図であるように、1 つの問題でも世界に共通する箇所があることに気づくことができたので、今後様々な見方から物事を捉えていきたいです。　世界中の人が描く未来を共感し合えたことは、これからの社会で大きな力になると思います。若者である私たちは、社会を担う世代であることをもっと自覚し、目の前の教科書通りのような知識を得るだけではなく、視野を広げていくことが重要であるように感じました。

ピープルズ・サミット(フラメンゴ公園)

ピープルズ・サミットでのダイアログ

公式サイドイベント(リオ・セントロ)

公式サイドイベントでの各国ユース

○東京駅八重洲地下街「東北物産展」

【概要】 この東北物産展は、明治大学と福島大学の共同企画で、昨年も行った。もともと、震災後のボランティアという共通点から、2011 年夏に、明治大学ボランティア拠点である浦安で、福島大学の学生が「東北物産展」に協力したことがきっかけである。東北ではない人たちにも、東北のことを忘れてほしくはないという、両大学の思いを込めた企画であり、東北をアピールできる機会でもある。震災から、2 年が経つちょうどその時期に震災を忘れないために、東京駅八重洲地下街での「東北物産展」を実施することになりました。

【活動期間】3/6(水)～3/12(火) 東京駅八重洲地下街 東北物産、募金、活動報告

【活動内容】東北のお菓子、お土産などを売ることがメインでした。募金活動も行いました。2012 年度の福島大学災害ボランティアセンターの活動を時系列順に追ったパネルなどを用いて、活動報告の場としても役割を果たしました。学生は、両大学ともに協力しながら、これらの活動を行いました。

【感想】

川崎 桃実(人間発達文化学類 2 年)

「普段、関わることのできない福島の学生と一緒に活動をして、福島の実情や、福島の人の思いを聞くことができた良かった。」とおっしゃっていただきました。こちらも、東京の人が福島をどのように思っているのか、などを知ることができました。福島の中にいるだけでは、知ることができないことを肌で感じてこられたような気がします。去年も参加しましたが、今年も参加してよかったと思います。日常とは変わった体験をたくさんの学生と共有することはとても有意義なことだと思いました。ひとりでは、味わえない達成感や、学生以外の一般の市民の皆さんとの関わり。どれも経験する価値のあるもので、今の私たちにしかできないことだと思いました。たくさんの笑顔と勇気をもらうことができました。

小林 理恵(人間発達文化学類 2 年)

私たちが福島で行っているボランティアや活動に興味や関心を持ってくれているということがとてもよく感じられ、うれしく思いました。東京の皆さんも震災を忘れずに自分には何ができるのかを考える姿勢が伝わってきました。

福島にいるだけではわからない東京の人々の被災地に対する思いや温かさを感じることができました。明治大学と共同ということでしたが、ここで得たボランティアを通じての関わりやつながりというものを大事にしていきたいと思いました。今後も福島や東北の被災地の現状を多くの人に伝えるような活動ができればいいと思います。

⑩子ども支援

○ふくしま子どもリフレッシュスキーキャンプ

【概要】 この企画立案当時は、東日本大震災から約一年が経とうとする中で原発問題はいまだに収束せず、福島県内の子どもたちは自由に外で遊べない状況が続いておりました。実際に、先生や親から雪遊びを控えるように注意されているという声を、仮設住宅の子どもたちからも聞きいていました。

我々は 2011 年夏にふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプを行い、三重県で放射能の恐怖から解放し思いっきり屋外活動のできる環境を提供し、福島県内の子どもたちの夏休みの思い出となりました。今回も春休みの期間をつかい、子どもたちの心を解放し、子どもたちが放射線の心配をしないで思いっきり野外での活動をする機会を作りたいと願い、多方面からの協力を得て企画しました。 企画にあたり、予てより関西大学スキー同好会「ZOO」OB 会からスキーを取り入れた子どもの保養キャンプを行いたいとのお話をいただいており、共催という形でスキーキャンプを行うことに決定しました。

【共同パートナー】 関西大学スキー同好会「ZOO」OB

【協賛】 アサヒグループ

【場所】 長野県 黒姫高原

【期間】 3 月 30 日（金）～4 月 1 日（日） 2 泊 3 日

【内容】 スキー、レクリエーション

【参加スタッフ】 ・福島大学生 14 名

・福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫

・関西大学スキー同好会「ZOO」OB 8 名

【行程】

3 月 30 日（金） 10：00 福島駅・郡山駅出発

〈バスで移動〉（途中、新潟「せんべい王国」にて工場見学）

17：00 長野県 黒姫高原 ホテル到着

3 月 21 日（土） 午前 スキー

午後 雨天のため、ホテル内でコースター作り

スキー場にて雪遊び（ソリ、雪合戦 など）

4 月 1 日（日） 午前 スキー

午後 ホテル出発

〈バスで移動〉

18：00 頃 福島駅・郡山駅着

※本事業は、福島県民間団体企画提案事業補助金、及び福島大学あぶくま学生基金からの女性をいただきました。

【スキーキャンプスタッフの声】

○伊藤真悟　（関西大学スキー同好会 ZOO・OB 会）

関西大学スキー同好会 ZOO･OB 会は､東日本大震災の被災地支援を模索していたところ、福島大学災害ボランティアセンターの皆様との出会いがあり、福島子供リフレッシュスキーキャンプを共催させていただくことができました。 当 OB 会にとっての原点でもあるゲレンデにおいて、福島の子供たちとともに過ごす時間がもてることは、スキーと長年かかわってきた我々にとって被災者のためにできるベストの選択肢でした。 原発事故の影響で不安をかかえながら生活をしている福島の子供たちに、信州の白銀の世界で思う存分楽しんでもうことができればと、当 OB 会は全面的に協力をさせていただき、当日は８名の OB 会メンバーが参加しました。 初心者から上級者まで様々なレベルの子供たちがいましたが、参加者全員がスキーの面白さと自然のすばらしさを満喫していただけたように思います。また、ソリ遊びや屋内でのコースターづくり、そしてビンゴ大会など盛りだくさんの３日間でした。 当 OB 会のメンバーはスキーの指導員という立場でしたが、子供たちの笑顔をみて、逆に我々が励まされ、教えられ、そして勇気づけられたりしました。最後に手をふってバスを見送ったことを今でも鮮明に覚えています。　福島大学ボランティアセンターの皆様とは、企画段階からご一緒に取り組ませていただきました。様々な人たちが同じゴールをめざして活動をする醍醐味を改めて感じることが出来ました。キャンプ当日のミーティングなど、我々が大学生のころを懐かしく思い出しました。 年々若い人たちとのギャップを感じることもありますが、福島大生の皆さんの企画力や行動力、また組織力を傍でみていて、我々OB 会一同とても頼もしく思えました。 このようなすばらしい企画をご一緒させていただき改めて御礼申し上げます。我々 OB 会は、今回のウインターキャンプを第一歩と考えています。福島大学の皆様とは今後も連携させていただければと希望しています。 最後になりましたが、今回のキャンプにご同行いただき、多岐にわたりご指導いただいた鈴木典夫団長に心より御礼申し上げます。

○片平茉美（福島大学 人間発達文化学類２年）

私は今回このリフレッシュウィンターキャンプに参加して、子どもたちが元気に遊んでいる姿を見ることができてよかったと思います。また、関西大学スキー同好会 OB の方々のご協力や、たくさんの方の寄付・協力により、リフレッシュスキーキャンプを行え、福島の子どもたちのために行動してくれる人たちがこんなにもいるのだということを感じとても嬉しく思いました。そう思うのと同時に子どもたちにも思いっきり楽しんでもらいたいと思いました。 長野県に 2 泊 3 日し、福島県の放射能問題から少し離れた子ども達は雪で思いっきり遊んでいました。関西大学 OB の方々が指導してくださり、子どもたちも楽しくスキーを行っているようでした。教えてもらったことがすぐできたりと、子どもたちの物事の吸収力の高さに改めて驚かされました。また、生活班対抗のスキー

リレーを行ったときは、いろいろなソリの乗り方をして、どうやったら早く滑れるのか自分たちで考えて行っているようでした。その後は自由行動で雪遊びをしたり、雪だるまを作ったりと各々好きな遊びを行っていました。私は子どもたちと一緒に雪だるまづくりをしていました。遊んでいた女の子同士で、「ここ福島じゃないから雪食べてもいいんだ」という会話を聞いたときに、子ども達も福島県の放射能問題について感じていることやストレスが少なからずもあるのだと感じました。大きい雪だるまを作ったり、雪合戦をしていた子どもたちは本当に楽しそうで、きっと思いっきり遊ぶことができたのだと思います。　最初は緊張してなかなか笑うことができなかった子どもたちも一緒の部屋に泊まり、一緒にスキーをすることで、最後にはみんな仲良くなっていました。笑顔が絶えず、私もつられて笑顔になってしまいました。最後に、「楽しかった」「またこの企画があるなら参加したい」と言ってくれる子どもがいたときはとても嬉しく感じました。子どもたちを引率する上で至らない点がたくさんあったと思うので、これからの活動に活かして、より楽しいものにしたいと思います。今回この企画に参加して、この子どもたちの笑顔を絶やさないようにしなければならないなと改めて感じることができました。また、上記してあるように、福島を想い行動してくれる人たちがいたからこそ、成功につながったのだということを忘れず活動していかなければならないと思いました。

せんべい作り体験

スキー（2 日目）

スキー場にて雪遊び

班対抗ソリ競争

コースター作り

スキー場にて記念撮影

○ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ 2012

【概要】　震災から 2 度目の夏休みを迎えてもいまだ放射線の不安は拭えず、子どもたちは保護者が日常生活の中で放射線のストレスを抱えることには変わりはありませんでした。その中で、微力でも自分たちにできることをやりたいという思いの下、昨年の三重サマーキャンプ、冬のスキーキャンプに加え、今年の夏も子ども向けのキャンプを実施することにしました。 今年は、予てよりつながりがあった日本福祉大学と共同で実施することとなり、日本福祉大学のある愛知県南知多へ福島県の小学生を招待することとなりました。

【共同パートナー】　日本福祉大学災害ボランティアセンター

【期間】 8 月 22 日（水）～25 日（土） 3 泊 4 日

【場所】 愛知県 南知多

【内容】 海水浴、バーベキュー、花火、水族館観光、地引網漁体験、など

【参加スタッフ】 ・福島大学生 20 名
・日本福祉大学生 17 名
・福島大学行政政策学類 教授 鈴木典夫
・日本福祉大学 教職員 3 名
・棚木良子さん（看護師）

【行程】

8 月 22 日（水） 7：30 頃 いわき・会津若松・郡山・福島駅 出発
13：00 仙台港フェリー出発

8 月 23 日（木） 10：00 名古屋港着
11：00～14：00 名古屋港水族館
15：30 ホテル到着
16：30 ビーチハイク

8 月 24 日（金） 9：00 地引網漁体験
10：00～15：00 海水浴（内海海水浴場）
16：00～20：00 バーベキュー、花火

8 月 25 日（土） 9：00 ホテル発
10：00 中部国際空港にておみやげ購入
12：30 名古屋駅発
〈新幹線で移動〉
17：00 頃 郡山・福島駅着

※本事業は、「うつくしま未来支援センター」からの予算措置を活用し、実施することが出来ました。

【キャンプスタッフの声】

○富田貴寛（日本福祉大学 福祉経営学部 ４年）

東日本大震災を契機に、日本福祉大学に災害ボランティアセンターが立ち上がりました。この震災における本学の主な被災地ボランティア先として、当初、宮城県と岩手県に赴いて支援活動に携わらせて頂きました。福島県に関しては、本学の卒業生であり、福島大学の准教授をされておられる丹波先生の御縁もあり、震災から１年ほど経ったころではありますが、日本福祉大学災害ボランティアセンター（以下、日福ボラセン）として、福島大学と関係を築かせて頂くきっかけになりました。

今回、「ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ」を愛知県の美浜町で行うということで、日福ボラセンの事務局としても福島の現状がどういう状況にあり、そこに暮らしている子どもたちはどのような様子なのかということも、福島大学のボランティアセンターの学生たちと情報共有をしていきました。また、日福ボラセンにとっては県外の学生や子どもたちを受け入れるといったことは初の試みでしたので、学生ボランティアを募ったり、食事や宿泊場所など、活動場所の施設交渉を行うといった受け入れの大変さを痛感しながら準備を進めていきました。その中で、地域の方々が「自分たちにできることならぜひ協力させて頂きたい」などといったお声を頂き、地域の方々の被災地を想う温かさも知ることができました。また、日福ボラセンの学生ボランティアと当日の下見を行うと共に、子どもたちとふれあうためのゲームを企画するなどして、子どもたちがより安全に楽しく過ごせるよう試行錯誤を重ねていきました。

活動初日、福島の学生や子どもたちと会うことをとても楽しみにしていた私たちでしたが、被災地の悲惨な現状をテレビなどのメディアを通して見ていたため、どのように関わっていけばいいのかという不安もありました。しかし、宿泊場所となるホテルの前にバスが到着し、降りてくる子どもたちを前にしたときは予想以上に元気な様子にとても驚きました。「被災地の子どもたち」と意識し過ぎていた私たちでしたが、それは自分たちが知っている「元気な子どもたち」となんら変わらないのではと感じた瞬間でした。しかし、子どもたちとの関係を築いていく中で、子どもたちの心情を垣間見た場面もありました。プログラムの中にある海水浴の時間において、海はやっぱり怖いかなと不安に思っていましたが、「福島じゃ海に入りたくても入れないからすごく楽しい」というような声をたくさんの子どもたちが言っていました。そんな様子を見て、子どもたちが普段十分に遊ぶことができない分思いきり楽しんでもらい、福島から送り出してくれた保護者の方にもたくさんの思い出話を聞いて頂きたいと思うようにもなりました。お見送りのときはとても寂しかったのですが、子どもたちの本当に楽しそうな姿や、お土産を早く保護者の方に渡したがっている姿を見て、この経験は子どもたちやその保護者、そして関わらせて頂いた私たちにとってもかけがえのない経験になったのではないかと感じています。最後に、子どもたちが大人になる上で、このキャンプの楽しい思い出が少しでも震災の辛い思い出を癒していけるきっかけになることを願っています。

○國分干城　（福島大学現代教養コース 4 年）

＜4 日間で子供たちがどう変化したか＞

・高学年が低学年の面倒を見るようになっていった。

家族同行では無かった今回、小学三年生～六年生の子供たちがまず自分自身で気付いたのが学年による自分の立ち位置を意識していた。いわゆる高学年の子は「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」となり、３、４年生の子たちのトイレや買い物に積極的に付いてみてあげる場面を日が経つごとに見受けられた。特に女の子にその傾向が強く、６年生の女の子には私自身助けられた部分が多くあった。

・男の子の方が全体に慣れるまで早い

キャンプが始まってから、始めに行ったのが船の上での集合写真。そこに至るまで男の子は「○○行きたい。」「○○したい。」と個人で主張することが多かった。逆に女の子は始めの方は、グループで何をするかというような、集団行動が多く見受けられた。しかし日にちが経つと逆転することが何度かあり、「慣れ」というのは、女の子は少し時間がかかるのだと分かった。慣れた後は、男の子も女の子も個人で「○○したい！」と個人から言われるので、引率側は苦労したと思う。

＜4 日間を通して＞

子供たちにとって一生の思い出となることを願ってやまないです。海ではしゃいで、ＢＢＱして、水族館行って、フェリーに乗って。私自身一生忘れないと思います。なぜなら２つのことを学んだからです。1 つめは、誰かのために一生懸命になれることがこんなにも充実していること、を学びました。子供たちが今何したいのか、子供たちが危険な目にあわず注意をしなければ、子供たちが･･･。今回子供たちが主体的となれるために自分のこれまでの経験を基にした意見ではなく、なんでもやらせてみることを重視しました。「経験」を「経験」で潰さないようなるべく自由にさせました。時には注意する場面もありましたが、子供たちの為を思い、一生懸命動くことが愛情の１つの形だと学びました。そしてもう一つが、「気遣う」ことです。「気を遣う」ことは大学生活でも多々ありました。今回のキャンプで、腰を落として、最後まで話を聞いて、子供たちに気を遣うのではなく、子供たちにを気遣う行動を取ることで「優しさ」というものを少し学びました。

フェリーにて

地引網漁体験

海水浴

砂遊び

バーベキュー

ビーチにて記念撮影

○のびのびキャンプ 2012

【概要】 2011 年に続き放射能問題により、子どもに焦点の当てた保養事業は県内各地で行われている。のびのびキャンプ 2012(以下のびキャン)は、二本松市のボランティアグループ「ひらそる」と災ボラの出会いから企画された事業である。コンセプトとして、マンツーマンで行われるキャンプであるからこその絆づくり、生涯学習があがる。マンツーマンであるからこそ、このような保養事業に参加できる子どももおり、先駆的な保養事業であったと思う。のびキャンの催行前に、数回ワークショップを行い、情報共有などを取りつつ本番へと臨んだ。

章末に掲載しているが、多くの後援を受けこの企画を再考することが出来た。改めてお礼を申し上げるとともに、保養事業の一つと指標となるべくその成果をまとまる。なお、facebook 内で、「畿央大学のびのびプロジェクト」で検索すると、このプロジェクトの外観が分かる。活動の様子などの細かくはそちらを参照にしていただきたい。

【主催団体】 福島大学災害ボランティアセンター・ボランティアグループひらそる
畿央大学・いわき明星大学

【実地期間】 2012 年 8 月 14 日~18 日

【会場】 奈良県立野外活動センター

【参加対象】二本松市の小学 3 年生から中学 3 年生。ひらそるとの関わりのある家庭及び二本松市内の小学校・中学校への広報により募集を募った。

【行程】 広報に用いたチラシを参照

【参加者の声】

○福島大学経済経営学類 1 年 坂下佑太～

私は昨年の夏に畿央大学主催の「のびのびキャンプ 2012」に参加させていただきました。このキャンプでは福島の子供たちを奈良のキャンプ場でのびのびと外で遊ぶということを趣旨としたキャンプで、私は学生スタッフとして活動してきました。キャンプでは学生と福島の子供たちがペアとなるワンツーマンという形をとっていて、学生と子供たちが密接に関わりながらキャンプをしました。キャンプ活動では、キャンプファイヤーや野外炊飯、自然と絡めたゲームが盛りだくさんで、子供たちはキャンプを楽しんでいる様子でした。実際私自身も楽しかったです。別れの際には学生と子供たちが共に涙する場面も見られ、別れが惜しく奈良を離れるのが辛かったです。本来なかなか交わることのない他の大学の学生さんと福島の子供たちと関わり、互いの考えや思いを共有することができ、大変貴重な経験となりました。皆が忘れられない思い出となったと思います。 私は今回のこの活動で初めて県外に住む方々の支援活動を目の当たりにしました。主催してくださった畿央大学の方々の子供たちに接する姿に人の温かさを感じ、福島の

ことを真摯に考えてくださる思いに感動を覚えました。そして、子供たちが外で遊ぶという当たり前なことに懸念を持たなくてはいけない福島の現状を再確認しました。私も被災地福島に住むものとして、福島のためにできることを身近なところから行っていきたいです。このプロジェクトが多くの人たちが携わり達成したように、福島の復興も皆が助け合って進んでいって欲しいです。

○　畿央大学健康科学部理学療法学科３年山野綾子

キャンプをすると決まってから、本当にこの日が待ち遠しく、早く子どもたちに会いたい！大自然の中でおもいっきりみんなと遊びたい！子どもたちの笑顔たくさん見たい！というような気持ちでいっぱいでした。 キャンプ中はペアの子やグループのみんなから本当にたくさんのことを学び、感じさせられました。ペアの子は、朝から晩まで元気いっぱいで、素直で優しいこころを持っていて、とても友達思いの子でした。ずっと行動を共にするからこそ見えてくる一面がたくさんあり、楽しさの反面にはキャンプの日が１日１日終わっていくごとにもっと一緒にいたいな、と寂しさがこみあげてくるような思いでした。お別れの日「楽しかった、ありがとう。」と言ってくれたことが何よりも一番嬉しかったです。 今回のキャンプでは、数多くの方々のご支援とご協力のおかげで、本当に楽しい４日間を過ごすことができました。関わっていただいたすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。 このキャンプ全体を通して、出会いの素晴らしさを実感することができました。私の中の大切な人もできました。子どもたちには、自分は一人ではなく、必ず誰かがそばにいることを、楽しかった思い出と共に、福島の現状と向き合おうとする時の糧としてもらいたいなと思います。そして私自身もこのキャンプの中で感じたことや、出会えたみんなのことを忘れず日々成長していこうと思います。最後に全員で歌った歌のように、次にまた逢えるときまでに、少しでも大きく・強く・優しい心になろう、と思います。福島のみんなの幸せを心から願っています。

○いわき明星大学心理学科２年大蔵寿美花

私が、のびのびキャンプに参加した最初の理由は、子供たちと一緒にキャンプができるからという、単純な理由から参加を決めました。しかし、キャンプが近づくにつれ、子供とマンツーマン体制ということ、子供となかなか打ち解けられないこと、などを事前指導で大学生たちの体験談を聞き、自分なんかにこの役が務まるのか、ペアの子供、他の子供たちと、本当の意味で仲良くなれるのか、グループに打ち解けることが出来るのか、すごく不安があるまま、のびのびキャンプは始まりました。 私がペアになった子は、中学生の女の子でした。中学生は思春期真っ只中の時期だし、小学生のように、テンション上げて、一緒に楽しんでいるだけの年頃でもないし、１番難しい時期の子に初めは、どう接したらいいのか、悩んだ。キャンプが始まり、初めのうちは、２人とも緊張していて、うまくコミュ

ニケーションとれてなかったり、気を使って何も言えなかったり、うまくかみ合わない部分もたくさんあったけど、キャンププログラムの中にあったBBQや、奈良観光、キャンドル作り、アスレチックなど、2人でずっと行動しているうちに、ペアの子から、話しかけてくれる回数も増えてきて、私がボケてたら、ツッコミも入れてくれるまで、仲良くなれて、最初に抱いていた不安もいつのまにかなくなっていて、本当に楽しい時間を一緒に過ごせて、今では、とてもいい思い出になっています。また、このキャンプでは、子供と学生２人１組のペアで、ペアの子のことを、ペアの大学生がしっかり面倒見なければいけないため、私自身すごく責任感を持ってやらなきゃ、という思いでやっていたので、キャンプが始まるまでの日々と、キャンプ終わってからを比べると、少ししっかりしてきたかなと感じられた。最終日は、キャンプ中に撮った写真を、スタッフさんたちがまとめてくれて、1つの映像として、みんなで見た。日数にすると、本当に短い期間だったけど、こんな短期間で、こんな深い繋がりが出来たことに、本当に感動したし、本当にいい体験をさせてもらったなという思いだった。また、このような機会があったら、ぜひまた参加させていただきたいと思いました。

○畿央大学　伊藤

のびのびキャンプについては企画から当日の運営補助、写真撮影、facebookでの広報、盛り上げ役（？）などを幅広く担当しました。本題に入る前に、少しのびのびキャンプにまつわる背景の話を少し。　２０１１年夏に、福島県の子ども２９名と一緒に栃木県宇都宮市で４泊５日のキャンプをしました。「福島には誰も来てくれねぇだ」という友人の声を聞き、「福島のために奈良からも何かしたい」という本学教員の思いからスタートしたキャンプに、本学学生・教職員など４６名のボランティアが集結。大自然の中で思い切りのびのび遊んでリラックスしてもらうことは勿論、子ども一人に大学生のパートナーがつくマンツーマンスタイルにすることで、「いつも誰かがそばにいる」ことの大切さ、つまりは「絆」を実感した、参加した全員にとって最高の夏の思い出になりました。　２０１２年は規模を拡大して、４４名の子どもたちを奈良に招待。計画段階で自らも被災者でありながら様々な支援をしている福島県内大学生たちの存在を知り、「大学生の心のケアも必要ではないか」と福島大学・いわき明星大学の学生１６名と本学の学生３６名が協働してキャンプを実施することになりました。教職員、調理ボランティアを含めると１５０人を超える多所帯のキャンプは、マンツーマンスタイルは崩さず子どもの数を増やし、３大学の学生が集まって、facebookでリアルタイムに広報する…という、気付けば初めてづくしのものになっていました。

うまくいったこと、想定通りに進まなかったこと。どちらも同じくらいあってドキドキハラハラの５日間でしたが、最終日の別れが近づいた時に、カメラのファインダー越しに見た子どもと学生の涙と充実の表情が、すべてを物語っていたの

ではないかと思います。子どもと大学生の「心のケア」ができたのかは評価しかねますが、参加した全員にとって人間的に大きく成長できた場になった確信はあります。仕事も学校も家庭も関係なく、あらゆる垣根を越えてしがらみのない世界で集まった同志が、同じ場所で同じ時間を過ごす。自分のためではなく損得勘定を抜きにして誰かのために行動する尊さを、心の底から実感しました。そしていつも心のどこかに、夏をともに過ごした仲間のことを思う自分がいます。

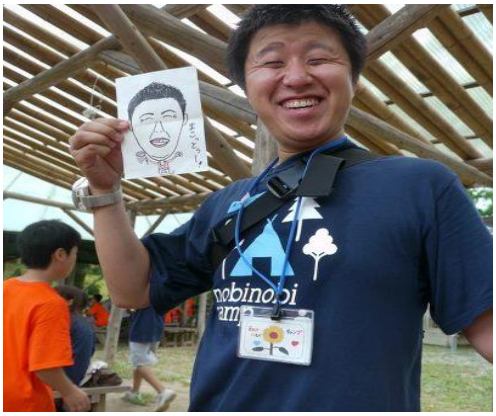
そしてこういうキャンプを、最高学府である大学が具体的な「支援のカタチ」として提示することにも大きな意味があるように思います。今回のキャンプも殆どの食材を奈良県内の皆様からご支援頂きました。「何か」をしたい人はたくさんいるけれど、具体的に差し伸べるべき「何か」が分からないのが大多数なのではないでしょうか。

「被災地支援」という言葉はカタくて重くて、おそらく被災地や被災した方々と過去に直接的な関係がない人にとってはとっつきにくい。でもキャンプは、心と心がつながる入り口として敷居は高くないはず。人生でも指折りの、素敵な経験と出会いをさせて頂きました。感謝！

【後援】(順不同)

AKTR 様 大阪籠球会様 たきびカレープロジェクト様 (株)明治様
シニア野菜ソムリエ西野慎一＆有志の皆様 純黒毛和牛専門店 (株)カワイ様
河合田映子様 (株)エーコープ近畿様 植村牧場様 三輪そうめん小西様
和歌山観音山フルーツガーデン様 東大寺門前夢風ひろば様 千房株式会社様
総本家 平宗様 大阪チョコベジ隊(日本野菜ソムリエ) 様
株式会社柳様 成田食品様 有限会社木下商店様 株式会社めん楽様
サロン・デ・ピュア様 三光丸(株) 様 大宮養鶏場様 神戸洋藝菓子ボックサン様
御菓子司しみず様 カルビー株式会社様 白石祐様 日本旅行様 平田進也様
奈良県立万葉博物館様 東大寺様 大石香織様 小松薫様 山田穂積様 蛭田政男様
おかんの店菊ちゃん様

【活動写真】】



【広報用チラシ】

みんなが笑って泣いた「のびのびキャンプ2011」から1年。3つの大学の学生が力を合わせて，この夏も，自然の中で，みんなが笑顔になって，いっしょに楽しめる，そんなキャンプを奈良でします！集まれ福島っ子！

【主催】のびのびプロジェクト実行委員会（慶央大学・ふくしまの笑顔をつなぐボランティアグループ"ひらそる"・学生団体福島大学災害ボランティアセンター・いわき明星大学人文学部心理学科・奈良県立野外活動センター）
【キャンプ地】奈良県立野外活動センター（奈良県奈良市都祁吐山町2040）
【出発日】2012年8月14日（火）～8月18日（土），4泊5日
【募集人数】40名（先着順）
【対象】原則として二本松市内に居住している小学4年生～中学3年生の児童
【参加費】2000円（保険料，宿泊実費として。7月15日の説明会時にお支払い下さい）

【行程】
■8月14日：二本松市役所集合（8時30分）・・・郡山駅～東京駅～名古屋駅・・・バスで現地に移動・・・開会式
■8月15日：フィールドアスレチック，自然探検
■8月16日：奈良公園，東大寺見学，キャンプファイヤー
■8月17日：フェアウェルプログラム～閉会式（～15時00分）・・・名古屋港（19時00分）～仙台港（翌16時40分）
■8月18日：仙台港（16時40分）・・・二本松市役所解散
＊プログラムは予定であり，変更の可能性があります。

【参加申込みについて】
①参加者氏名②学年③年齢④性別⑤保護者氏名⑥住所⑦電話番号⑧保護者のメールアドレス（携帯、パソコン）⑨備考を明記の上，下記のメールアドレスまでお申し込み下さい。メールでの申し込みが難しい場合は，問い合わせ先の電話番号でもかまいません。
申込先：nobinobicamp2012@gmail.com（学生団体福島大学災害ボランティアセンター）
問い合わせ電話番号：080-4076-1879（通話料無料，担当：安達，9時～19時）
＊参加決定の方には後日詳細な案内をメールか郵送で送付いたします。
＊7月15日に参加者と保護者を対象にした説明会を行います（14時00分～17時00分，二本松市市民交流センター）。キャンプに参加される方は可能な限りご参加ください。

内容に関するお問い合わせは
（学生団体）福島大学災害ボランティアセンターまで
（担当：安達）
メール：nobinobicamp2012@gmail.com
TEL：080-4076-1879（通話料無料，9時～19時）

Kio 慶央大学
ひらそる
いわき明星大学
奈良県立野外活動センター

⑩子ども支援

Fukushima Kids Support Project 「福島の子ども達 宮崎に来んね！キャンプ」

【趣旨】東日本大震災によって引き起こされた、福島第一原発事故の影響でストレスの中で生活していたり、外遊びができなかったりする福島の親子に、自然の中で、安心して思いっきり遊んでもらいたいという思いで、宮崎に来んね！キャンプをアースウォーカーズが企画しました。

【期間】第１弾　2012 年 2 月 24 日（金）～27 日（月）　3 泊 4 日
第２弾　2013 年 2 月 17 日（日）～24 日（日）　7 泊 8 日

【主催】特定非営利活動法人 アースウォーカーズ

【参加者】
第１弾　5 組 14 名（大人 5 名、子ども 9 名）　災ボラ 2 名
第２弾　6 組 13 名（大人 6 名、子ども 7 名）　災ボラ 2 名

※今回の企画では、2011 年の「ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ」でお世話になった小玉さんが代表を務めるアースウォーカーズからの依頼で、災ボラでは協力・引率ボランティアという形で参加

【日程】

第１弾
１日目　羽田空港、宮崎空港、平和台公園（ヨガ、ジャンベ体験）、ホームステイ
２日目　農業体験、好隣梅ハイキング、放射能勉強会、ホームステイ
３日目　ソフトバンクオープン戦観戦、チキン南蛮料理教室、ホームステイ
４日目　宮崎観光（堀切峠、青島）、宮崎空港、羽田空港

第２弾
１日目　成田空港、福岡空港、熊本泊
２日目　熊本発、小林着、交流会
３日目　イチゴ狩り、サンフレッチェ広島選手交流
４日目　プロ野球・WBC 見学、ビーチハイク、放射能勉強会、アロママッサージ
５日目　平和台公園、骨盤体操教室
６日目　ソフトバンクホークス交流、蜂之巣公園キャンプ場、桜エイサー太鼓鑑賞
７日目　観光船マリンビューワーなんごう、げんき村、日向学院 海の家
８日目　宮崎空港、羽田空港、福島着

【感想】

○小林 亜衣さん（NPO 法人アースウォーカーズ 事務局）

福島第一原発事故の影響で、ストレスの中生活していたり、外遊びが出来ない福島の親子に、多数のプロスポーツチームもキャンプ中の暖かい宮崎で、安心しておもいっきり遊んでもらいたいという思いで開催しました。実際に宮崎にやってきた子ども達は、始め、裸足になって遊ぼうと言っても、躊躇していたり、落ちていたどんぐりを、お母さんに「さわっていいの？」と確かめたりしていて、福島の現状は本当に深刻だなと思いました。また、途中、男の子がリュックに落ち葉を詰めていました。「どうするの？」と聞くと、男の子は「福島には悪いばい菌が降っていて、落ち葉や花や虫に触ってはいけないの。久しぶりに触って嬉しかったから、お友達のお土産にするの！」と嬉しそうに話してくれました。そして、最後空港に行く前に、海の上にある神社に寄った時、子ども達は神社には行かず、嬉しそうに水遊びをしていました。そして、「帰ったらもう触れないから、今のうちに触っておこう！」と言っていました。胸が締め付けられそうになりながら、水遊びをする子ども達を見ていました。いろんな我慢をしながら暮らしているこの子どもたちに、健康被害が無い事を、切に願いました。遠い宮崎からできる支援は少ないかもしれませんが、福島のそんな現状が忘れられることのないようにする為にも、宮崎での活動を続けいこうと思っています。そして、参加してくださるボランティアの皆さんが、これをきっかけにエネルギー問題の事等を真剣に考えるきっかけになってもらえたらとも思います。今後も、福島大学災害ボランティアセンターの皆さんと協力して活動を行って行けたらと思いますので、宜しくお願いいたします。

○矢吹 徹（福島大学人間発達文化学類 2 年）

今回のキャンプではボランティアスタッフとして参加者の皆様と共に一週間過ごさせていただいたのですが、繋がりを強く感じた一週間でした。行く先々でボランティアの面々は変わるものの、どの地域に行ってもあたたかいおもてなしをしてくださり、子どもの顔から笑顔が絶えることはありませんでした。人との繋がりを遠く離れた地で感じられたことは、これからの大きな支えになると思います。また、子どもの姿で印象に残っているのは子どもたちが思い切り泥遊びをしていた光景です。“ただの泥遊び？”と思うかもしれないが福島では泥遊びどころか外遊びも満足にできない状況にあります。この光景を見て、事実を聞いて、驚き悲しむ宮崎の方もいました。当たり前が当たり前でないという事実を福島の人だけでなく、より多くの人に知ってもらいたいです。この一週間、普段できないような体験や、美味しい食事、美しい自然、温かな心に触れ、子どもたちはとてもリフレッシュできたのではないかと思います。事実、私もリフレッシュさせていただきました。参加者の保護者の方と話していて、このような保養キャンプは需要があり、非常に求められているのだと感じました。まだ放射能の影響により苦しんでいる人がたくさんいるという事実を多くの人と共有し合いながら、これからも数多く支援していきたいです。

平和台公園にてジャンベ体験

野菜収穫

プロ野球選手との交流

チキン南蛮料理教室

イチゴ狩り

ビーチハイク

※詳細・報告書等は、アースウォーカーズのホームページに記載されています。
そちらの方もぜひご覧ください。URL: http://earthwalkers.jp

【資料】

第2弾

福島の子どもたち 宮崎に来んねキャンプ!

2月17日～24日　7泊8日（希望者は延長あり）

募集期間 2013年1月13日(日)～1月25日(金)予定

原発事故の放射能の影響で外遊びが出来ない福島の親子のリフレッシュキャンプ。ソフトバンクや広島、西武などプロ野球やJリーグなどプロスポーツもキャンプ中の宮崎に来てリフレッシュしませんか?

参加費：大人 20,000円　子ども5,000円

プロスポーツチームとの交流や観戦の他に、福岡・熊本観光、温泉、水中観光船など計画を計画しています。また、前回好評だった、農業体験に加え、みかん刈りや、宮崎郷土料理教室なども開催予定です。さらに、専門家による放射能と健康被害についての相談会や、希望者には放射能の内部被曝の検査を今回も無料で受けれるよう手配中です。

問い合わせ：NPO法人アースウォーカーズ　HP：http://earthwalkers.jp/　Mail：info@earthwalkers.jp
TEL：090-8301-1123（小玉）　070-5812-4297（小林）

主催：NPO法人アースウォーカーズ　共催：福島大学災害ボランティアセンター　NPO法人TEAM二本松　ハーメルンプロジェクト　NPO法人JIM-NET

協力：宮崎市観光協会　NPO法人みやざき災害救援センター　天空カフェZeal九条の会　オーガニックレストランSizenボランティアの会
さよなら原発小林連絡会　宮崎3.11虹のかけはしプロジェクト　ふくおか教志の会　0円キャンプスクール熊本

⑪農地支援

Tattonプロジェクト２０１２年度活動報告

【概要】　福島県新地町の農家を支援する「tatton（田んぼ＋コットン〔綿〕）プロジェクト」は、昨年度の「田んぼエイドプロジェクト」から名前を少し変え、二年目の活動となりました。この活動はめざましテレビと日本財団の共同プロジェクトで、津波による塩害で耕作不能となってしまった田んぼを復活させるというものです。その方法は、土壌塩分を吸収しながら成長する「綿花」を栽培し、土壌の塩分濃度を低くするというものです。 昨年度の成功を受け、今年度はさらに規模を拡大して活動してきました。

【活動実績】

日時（2012年~2013年	場所	内容
6月5日	新地町	種まき
6月24日	新地町	田んぼの除草作業
8月5日	新地町	田んぼの除草作業・交流会
9月26日	新地町	田んぼの除草作業
12月21日	新地町	綿花の摘み取り
1月15日	新地町	綿花の取り出し作業
2月14日	東京都内	取材・反省会・懇親会

活動内容は、主に綿花栽培中の田んぼの持ち主である目黒さんのお手伝いでした。具体的には上の表に記載した通り、種まきや除草、そして収穫です。これらの人手が必要となる作業への参加が中心です。参加していたのは福島大学の学生だけでなく、地元の方をはじめ、フジテレビの担当者の方、日本財団の方、他大学の学生、そして今年度はゴールデンボンバーのみなさんも参加していました。

【学生の声】

○芳賀 葉子（人間発達文化学類２年）

今年度は昨年度に比べて、綿花を植える田んぼの面積が大幅に広くなったため、活動する回数も多くなりました。そのため、たくさんの方々と交流する機会に恵まれました。そこで毎回耳にしたのが「また来てくれたんだ、ありがとう」という嬉しいお言葉です。毎回のお手伝いに参加することが難しい状況であっても、私たちは歓迎してくださる皆さんが居たからこそ、できるだけ足を運びたいと強く感じていました。 また、活動を通して沿岸地域のこれからのことや現状についても、詳しくお伺いすることができました。なかなか思うようには進まないこと、tattonのようなプロジェクトがあるからこそ前に進むことができたということ、そしてゆっくりでも確実に前に進んでいくことの大切さなど。今回、田んぼを提供してくださった目黒さんの農家で作った野菜が、東京都内の料亭でお料理

に使われているということも聞き、様々なところで繋がっていることを実感しました。

まず第一に感じたのが、やはり現地に行って活動に参加するということがどれほど身になるのか、ということです。沿岸地域の復興には時間がかかるということは何度か耳にしていました。その言葉の意味を、改めて感じたのです。多くの人手を要し、一年間かけてやっと一農家の田んぼを復活させることができました。その達成感は何にも代えられません。Tatton プロジェクトでは、毎回新地町の方々が暖かく迎えてくださったおかげで、大変な作業も楽しく感じることができました。そして、綿花は成長していく過程がよく分かるし、活動の成果も目に見えやすいため、モチベーションも上がりました。行くたびに変化がある綿花の成長を見届けるのが、毎回の楽しみでした。

目に見えない場所で復興と戦っている人がたくさんいると思います。長い時間をかけ、そして何人もの人が力を添え、少しずつでも前に進んでいくしかないのだと強く感じます。その過程で生まれる会話やふれあい、つながりは、一生の宝となります。

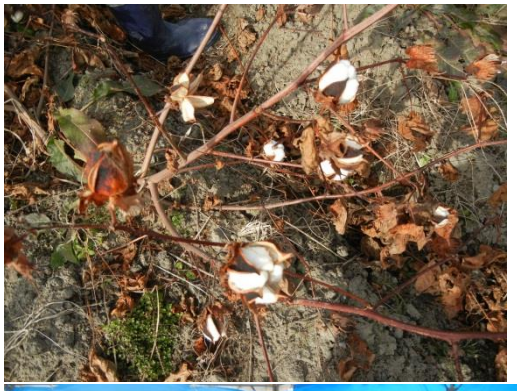
今年度でこのプロジェクトは一旦区切りとなりますが、今後も様々な活動に参加していければと思っています。

○川崎 桃実（人間発達文化学類２年）

今回は新地町の方々と日本財団、メディアとの交流があり、大変なことも勉強になることもたくさんありました。新地町の方々は、行く度に「助かったよ。また、おいでね！」と言ってくれて楽しみにしてくれていました。日本財団の方も「ここに来るのは楽しみなんだ」と言ってくださいました。時には「しばらく海には行ってないな」とおっしゃっていました。しかし、とても前向きな姿勢で夫婦で協力しまた、地域で協力していました。活動が終わった今でも、交流があり、その交流は元気の源になっています！

この活動では、田んぼの復活を目的にやっていて、確実に成果をあげていました。毎日一生懸命新地町の方が、大切に綿花を育てているところに私たちが少しだけお手伝いしました。毎回、綿花が成長しているのが著しく分かり、達成感がありました。この活動を通して色んな人と出会い、色んなことを学ぶことが出来たと思います。福島が前進するように、こういった活動を何かの形で続けていきたいです。

【活動写真】（綿花収穫時）



⑫復興のまちづくり活動

○福島市放射線対策先進地視察事業団

【概要】福島市主催の事業で、チェルノブイリ原発事故後の放射線対策の取り組みを学ぶため、市民１５人の視察団をベラルーシに派遣した。チェルノブイリ原発事故から 26 年が経過するベラルーシ共和国を訪問し、現地での健康管理や放射線対策を視察した。学生や医師、教師など、福島市に住所を置く者から団員を募り、現地での健康管理や放射線対策などを学び、市政に反映することが目的である。ベラルーシ国立大学の学生とは通訳の補助を通して交流を深めた。

【活動期間】平成 24 年 11 月 20 日～27 日

【場所】ベラルーシ・ミンスク、ゴメリ、モズィリ

【参加者】災ボラ 1 名、県内より学生 2 名（他視察団員、合計 名）

【内容】ロシア・ベラルーシ情報センター、児童保養施設(ジダノヴィチ)、小児がんセンター、モズィリ地区政府、国立モズィリ大学、モズィリ市産院、ソフホーズコンビナート(ザリャー)、ゴメリ州政府執行委員会、放射線学研究所、ゴメリ州チェルノブイリ事故対策本部、ストレリチェヴォ中学校、乳製品工場などの訪問・視察。現地の大学生や市民との交流、訪問先での質疑応答。

【感想】本間 美雪（福島大学行政政策学類 3 年）

私がベラルーシへ視察に行く目的は主に 2 つありました。1 つは私と同年代の学生が放射能に対して関心を持って過ごしているのかを直接聞くこと、　もう 1 つは一般市民が原発事故からどのような思いで過ごしてきたのかを知り、福島の今後のイメージを立てることです。

ベラルーシの大学生とは、現地滞在中に放射能のことから生活、文化のことまで話をすることができました。「普段から放射能に関心はあるか」ということを尋ねると、「よく考えています。事故から 20 年、30 年経って、私の周りでも影響が出てきている人がいるから、気をつけなければなりません。」とのことでした。健康診断の際にホールボディカウンターを受けたり、保養施設に行っていたりと、その環境がいい意味で当たり前になっているように感じます。これは、私が日本で無農薬の野菜を選ぶのと同じように、普段から気を付けて過ごすよう教えられ、またそれが当然だと考えていることと近い感覚を覚えました。この視点から見ると、学校が教育の拠点となっていることが共通点だと言えると思います。ベラルーシでは小学校の授業でさえ放射線教育が行われており、子ども達が楽しみと真剣さを交えて学習していました。また学校が保護者や地域住民の教育の拠点となり、彼らの間で知識や関心が定着しているのではないでしょうか。

また、市民との交流では現在の生活の中であまり放射能によるストレスを受けていない印象を受けました。時間の経過だけではなく、補償や情報の面で信頼を取り戻そうとした結果だと思います。市民と話をしたことが私の中で最も共感で

きた点であり、また疑問を抱くことができた点でもありました。原子力の利用に関して前向きで、「原発は怖いが、国の利益のためなら仕方がない」という声は、現在の福島市に住む私の予想に反するものでしたが、住民自身の口から聞いたことに意味がありました。それだけに、今回の視察ではそのような対話の場が少なく、もっと打ち解けて話をする機会があればよかったと考えています。

26 年後の福島が、震災や放射能と前向きに向き合い、健康に注意しながら生活しているか、震災や原発事故が遠い過去のようになってしまっているかは、私たちの世代次第で変わるような気がしてなりません。事故の教訓を忘れない、というベラルーシの姿勢を見習っていきたいです。

ロシア・ベラルーシ情報センター

放射能危険警告の看板

ベラルーシ国立大学の学生

放射線教育（授業）

⑯災害に関する他団体との共同活動

Bridge for Fukushima 相馬基地

【概要】 Bridge for Fukushima は震災後に発足した NPO 法人で、現在相馬市内に「相馬基地」という拠点を設け、胎児・乳幼児のいる家庭を対象に、定期的な支援物資の配布を行っている。今年度、福島大学災害ボランティアセンターでは、基地内に設けたキッズスペースを活用して子どもや地域の住民の方とのふれあいイベントを Bridge for Fukushima と共同で開催した。そのスペース自体が子どもの遊び場（＝リフレッシュの場）や保護者同士の交流・情報交換の場として機能するということが目的であった。

また活動の中で、地元の住民の方に案内していただき、2012 年４月に警戒区域から解除された南相馬市小高区を視察することが出来た。2012 年５月 26 日に視察した際の相馬市小高区は、電気が復旧し始めた状態であった。しかし住民は自宅に入ることが出来るが宿泊が出来ない状態であったことや、早く除染をしたいが上下水道の使用が不可能な状態であったことなど、参加者はこの地域に住んでいた住民を取り巻く現状や、まだ何も進んでいない被災地の現状を知ることが出来た。

【活動日】 子どもたちとのふれあいイベント：2012 年５月 26 日
餅つき　　：2012 年 12 月 22 日
バレンタインデーイベント　　：2013 年２月９日

【場所】 相馬基地（相馬市粟津）

【内容】 キッズルームでの子どもたちとのふれあい、地域住民の方との季節のイベントを通じた交流（餅つき、バレンタインデーにちなんだイベント）

【参加者】 学生各回２～４名

【今後の課題】

当初は毎月１回継続的にイベントを開催する予定であったが、結果的に今年度中は３回しかイベントが実施できなかった。今後の課題として、現地に行くための交通手段の確保や継続的に活動できるメンバーの確保などが挙げられる。 また、数少ない活動の中でも、地域住民の方の「またやってほしい」という声はイベントを行うたびに聞くことが出来た。今後は少しでもそのニーズに応えられるように、どのような活動の仕方であれば継続的に支援をしていけるのかを考え、またどのような活動が求められているかなどを、Bridge for Fukushima の方と連携を取りながら確認し、活動を継続していきたい。

【活動の様子】※子どもたちとのふれあいイベント

【感想】

奥村礼　（人間発達文化学類１年、餅つきに参加）

　お手伝いの内容としては、物資の受け渡し係とお餅つき係とキッズルームでのお世話の三つの担当に分かれ、自分は子供たちのお世話を担当しました。子供たちはみんなとても元気で、また、素直な子ばかりでした。 震災を経験し、プレハブでの生活という状況がどのように子供の成長に関わるかは自分にはわからないし、そのような問題は短期的なボランティアではなく地域に根差した長期的な目で見なくてはならないということは分かっています。そのため、自分がボランティアをするときに心掛けていることは、その時その場所にいる人がその瞬間に最高の笑顔になれる空間を作るということです。 今日の活動終了後、親御さんたちや相馬基地のスタッフの方々から「ここに来てからこんなにも楽しそうに笑顔で遊ぶ子供たちを見るのは初めてです。ありがとうございました。」という言葉をいただいて、それこそボランティア冥利に尽きるなと思い、感激しました。

おわりに

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災発生。

あの日から、多くの人の生活が大きく動き出しました。震災で家族や友人、家、仕事など大切なものを失ってしまった人もいます。ふるさとを出なければいけなくなった人もいます。そして、先の見えない避難生活、目には見えない放射能を気にしながらの生活が始まりました。それから 2 年の月日が経ちます。震災後、生活が大きく変わったのは、被災した人だけではありません。前に進むために、できることをしようと動き出した人たちもいます。

私もその 1 人です。私は震災後、何か自分にできることをやりたいという思いで、大学避難所運営に参加しました。大学避難所に避難してきた方の表情は今でもはっきり覚えています。表情に全く笑顔がありませんでした。その時、私に何ができるのか怖くなりました。ですが、それと同時に笑顔を取り戻してほしいという思いもありました。約 1 ヶ月半の避難所で避難者とコミュニケーションを多くとり、少しずつ笑顔が戻っていく姿を見ていて、とても嬉しく感じ、もっと多くの人の心からの笑顔を見たいと思いました。

私以外にも、いろんな避難所で活動していた福大生はさまざまな思いをもっていました。その中で、さまざまな思いをもった福大生が中心となり、今後も「福島のために」と『(学生団体）福島大学災害ボランティアセンター』を設立しました。

設立後は、避難所では活動できなかった多くの福大生も活動に参加してきました。中には、震災時に高校生でしたが、福島で自分にできることをしたいという思いで入学してきた学生もいました。

災ボラが設立され、2 年が経ちます。2 年目もほんとにさまざまな活動をしてきました。仮設住宅では、継続して足湯・季節のイベント等を行い、住民と直接話しを聞いたり、話したり、触れあったりしてきました。仮設住宅での生活も 2 年目に入り、顔なじみも増えてきて、福大生が来るのを楽しみにしてくれている人も多くいて嬉しく感じました。しかし、住民の中には生活が落ち着いてはきたものの、まだまだ先が見えない生活へのストレスは残っているとも感じました。被災地では、避難指示解除となった地区での泥出し・瓦礫撤去を行いました。しかし、処理する場所がなく作業をしても放置状態となっていました。

また、子ども支援もリフレッシュキャンプ・学習遊び支援を継続的に行ってきましたが、家族支援として、家族の中で県内に残った人と県外に避難して離ればなれになって生活する人が再会して一時を過ごす時間を提供するキャンプを新たに行いました。久々の再会に笑顔の家族。しかし、その笑顔の裏には慣れない土地での生活や子どもの学校のこと、ふるさとへの思い等、不安に思っていることが多くあるという話を聞きました。ですが、家族が一緒に生活するのが本来の形です。それができない現状があるつらさを感じたキャン

プでした。

他にも、報告書をご覧のとおり、福島が前に進むためにさまざまな活動をしてきました。その中で、多くのつながりも生まれました。県内の他大学の学生や全国各地の大学や学生、企業や NPO の団体、個人等々の方の、活動の受け入れや共同で活動を行ったり、話を聞きに来たり、報告会やシンポジウムにも数多く参加させていただき、多くの方と出会いました。県外の方には、福島のリアルを見て、聞いて、さまざまな思いを感じてもらえたと思います。また、活動するための資金や物資を送って頂いたりもしました。活動は私たちで資金や物資集めを行うため、私たちの活動を理解していただき、企業や個人から資金や物資の支援をしていただけることはとてもありがたかったです。この場を借りて御礼申し上げます。

震災から 2 年が経ちますが、福島が前に進むにはまだまだ程遠い現状であるということを感じました。ですが、たとえ少しであったとしても前に進んで行くことが必要であると思います。そのためにも、行っている活動を継続することが必要であると思います。仮設での支援であったり、子ども・家族支援であったり、そのほかの活動も含めて、これからの長期的になる支援の中でそういった考えをもっていきたいと思います。私たちは大学生です。おじいちゃん・おばあちゃんには孫のように、子どもたちにはお兄ちゃん・お姉ちゃんのように接してくれる年代です。元気を与えようと活動していても、接しているうちに私たちも自然と笑顔になり元気をもらっています。その時いつも笑顔って素敵だと感じます。これからも私は、心からの笑顔が見られるように、そして『笑顔のループ』として広がっていくように活動していきたいと思います。

最後になりましたが、私たちと一緒になって活動、あるいは後方支援してくださいました各大学学生、大学関係者様。活動について詳しく取り上げ、あらゆる媒体で広報してくださいました各メディア関係者様。活動協力に加え、報告書作成にあたりご執筆くださいました各団体、個人の皆様。本当にありがとうございました。ご協力くださったすべての方々の名前を列挙することが出来ず大変申し訳ありませんが、皆様の支えがあり私たちはこのような報告書を作成することができました。心から御礼申し上げます。

今後とも私たち「学生団体福島大学災害ボランティアセンター」をよろしくお願いいたします。

（学生団体）福島大学災害ボランティアセンター
神　貴大